

浄土宗西山禅林寺派

# 潮音寺だより

<http://www.ne.jp/asahi/choonji/namo/>

ナモの寺 検索

〒456-0034 名古屋市熱田区伝馬一丁目 10-11

第319号  
平成22年5月

電話 052-671-4831

ファックス 052-671-4856

[choonji@aichi.email.ne.jp](mailto:choonji@aichi.email.ne.jp)



撮影：超空正道

【出典】『六祖壇経』ろくそだんきやう 禅宗六祖候補であつた神秀の偈「身はこれ菩提樹、心は明鏡台の如し、時々勤めて払拭して、塵埃じんあいをして惹ひかしむること莫なれ」に対し、慧能えのうが「菩提ぼだい本もとより樹無もし、明鏡めいけいも亦また台に非はずず、本来無もと一物いちぶつ、何いれぬの処ところにか塵埃じんあいを惹ひかん」と返し、六祖と認められた。

ああ  
お金があつたなら

ああ

頭が良かったら

美人であつたら

何か才能があつたなら

いや

せめて

健康であつたなら

ああ：

あれもこれもと

無い物ねだり

まず

今いのちを

頂いただきていることに感謝

本来無一物

何なにの

不足ふそくがあろう

本来無一物ほんらいむいちもつ

最近、明るい話題が少ないようです。マスコミでも、ネガティブなニュースばかりが強調されたりしますので、どうもよくありません。ところが、どういうわけか、自分の周りの他人を見てみると、実に楽しそうにしているようで、イライラ、クヨクヨしているのは自分だけのように思えてくるから不思議です。しかし、悩みのない人間なんてはおりません。金持ちが金持ちで、美人は美人で、聞くところによれば、一般人には分からない悩みがあるのだそうです。悩みの多くは、出世できない、成果が上がらない、容姿に不満がある、お金がない、健康に自信がないといった、要は、あれも足りない、これも足りない、さらには物事すべてが悲観的・否定的にな

り、自分はだめなんだと、悪い方向、悪い方向に考えが向かっていってしまう**マイナス思考**に由来するものです。だから、悪い状況にあるときには特に、物事を楽観的・肯定的にとらえ、気持ちを前向きにしていく、**プラス思考**でなくてはならないといわれます。

たとえば、砂漠にひとり取り残されたとして、水筒の水が半分になつたとき、「もう半分もなくなつてしまつた。あと半分しか残つていない」と思うと、気持ちが萎なえてきますが、「まだ半分も残つている」と思えば、不安や恐れといったものを感じることが少なく、結果も好転する可能性がずいぶん高まるものと考えられます。

ただ、そのようなことは、頭では分かっているても、実生活の中で生かし応用できるかというところ

れが甚だ難しいのです。スポーツで、ごく初歩的な鉄棒の逆上がりにしても、練習しないとできません。まして、オリンピック級選手がするようなウルトラ級の技は、基礎体力をつけた上で、よほどの鍛錬が必要です。

精神面においてもそれは同じで、**プラス思考**を自分のものとするためには、先ずもって、基礎となる智慧を養わねばなりません。その点、仏教はさまざまの人に、さまざまな人にあつた、さまざまな智慧を養うことのできる教えを提供してくれています。なかでも、「**因縁**」「**空**」の教えは仏教の基本で、すべては、この教えを基に展開されるといっても過言ではありません。

私わたしという存在も、誕生以前、影かげも形かたちもなかったのが、両親という

因縁を得てこの世に生を受け、目

に見えるもの見えないうもの、これまでさまざま縁をいただいて、今を生きているわけです。ですから、その縁に感謝こそすれ、不足なぞあるはずがないというのが道理です。そこをところを一語で端的に表したのが「**本来無一物**」であります。この言葉は、マイナ又思考病に罹っているわれわれを、一気にプラス思考健康体に導いてくれます。これぞ禅語の醍醐味といえます。ただ、われわれに「**因縁**」と「**空**」の智慧の大地ができていないと「あつ、そう」で終わってしまい、その意味で、仏法の智慧という基礎体力をつけておく必要性があるのです。

ところで、「**本来無一物**」は、達磨大師を始祖とする中国禅宗の六祖にあたる慧能の言葉で、こん

なエピソードがあります。

慧能の師（弘忍）が、弟子の誰かに法灯を嗣がせようと、自分の修行した心境を偈文で示すように告げた折のことです。当時、門下第一と目されていたのは神秀でした。その偈は、

**身はこれ菩提樹**

**心は明鏡台の如し**

**時々に勤めて拭拭して**

**塵埃をして惹かむること莫れ**

で、その意味は「この身は悟りを宿す樹であり、心は澄んだ鏡の台の如きもの。故に、常に拭いたり拭いたりして、煩惱の塵や埃をつけてはならない」というものでした。つまり、修行の大切さを示したのです。

この偈を見た当時、米をついていた寺男の慧能が、そんなら自分も出してみるかと、その隣に張り

出したのが次の偈です。

**菩提本より樹無し**

**明鏡も亦台に非ず**

**本来無一物**

**何れの処にか塵埃を惹かん**

つまり、「この世界は空であり、身に菩提を宿すといったところで、この身は空である。心の塵を払い鏡のように磨くといったところで、その鏡も同じく空である。悟ろうというこだわりこそ迷い。本来からして何も無いのだ。どこに塵埃のたまりようがあるうか」と切り返したのです。このことを契機に、慧能は袈裟と鉄鉢を授かり、六祖を嗣いだということでした。また、中国の詩人、蘇東坡は「**無一物中无尽藏、花有月月有楼台有**」と詠じています。「**空**」は、ときに、すばらしい世界を展開するものでもあるのです。

## ◎方丈

「丈」とはもちろん長さの単位のことです。つまり三・三メートルの長さをいう。それが「方」、つまり四方にあるわけで、とにかく狭い部屋を表す代名詞といっている。

ところがこの語、今ではお寺の住職や師の敬称、あるいはその人たちの住まいを指すようになっていきました。事の起りは釈迦の時代のインドに求めることができます。

当時ヴァイシャーリーという町に、維摩ゆいまという在家の信者がいた。この人が住んでいたのが方丈。彼はこの狭い部屋を訪ねてくる人々を、次々と仏道に導いたとされている。ここから転じて、維摩のように簡素な暮らしをすることが僧侶たちの生活信条とされ、それを実践する人々が「方丈さん」と呼ば

れるようになったという。

有名な鴨長明の『方丈記』も、もちろんこれにちなんでいる。世をはかなんで出家遁世した彼は、小さな方丈の庵いおりを結ぶのだが、そのきつかけ、あるいはその後の周辺の状況、思いをつづつたのが、この著である。

しかしこの方丈、計算してみると、現代の四畳半に比べて三割方広い。維摩も鴨長明も、現代のうさぎ小屋に住む我々よりは、はるかに心に余裕がある生活をしていたことだけは間違いない。

（『仏教のことば』早わかり事典）

## 雑記

## ▼大地震



世界のあちこちで大地震が頻発しております。今年になってす

に、ハイチ（1/12）・チリ（2/27）

中国青海省（4/14）と立て続けに、それぞれ甚大な被害がでています。そしてアイスランドの火山噴火（4/14）も、ヨーロッパ各地の空港が閉鎖を余儀なくされ、深刻な事態になっていきます。科学者は、太陽の黒点との関連を指摘しています。いずれは収まるものと思われませんが、不気味ではあります。

## ▼吉野山

その黒点との関連もあるのか、四月半ばまで寒波が押し寄せ、野菜や母の日のカーネーションにも影響が心配されています。でも、桜は長持ちして、かねてから念願の吉野の千本桜を見てきました。吉水神社からの景色は絶景！

## ◆薫風もまた凪もあり

鯉のぼり 沐魚